

「また」と「まだ」の意味に関する認知言語学的一考察

産能短期大学能率科 長谷川玲子

名古屋外国語大学外国語学部 加藤陽子(非常勤講師)

東北大学国際文化研究科 上原 聡

【要旨】

日本語の「また」と「まだ」は、その形態上の類似とは裏腹に、事象の「反復/継続」という概念によって明確に区別できるものと考えられている。本稿は、日本語学習者の混同の実態と要因を探った先行研究(長谷川2000)^(注1)から、「また」「まだ」には混同の要素となる類似性があることを認め、更に詳細な認知言語学的分析を試みたものである。その結果、「また」と「まだ」は時間軸に沿った同一性のスキニングが行われる点で類似していること、また、「また」は個別性、「まだ」は連続性が差異を決定づける特徴であるが、その選択は、同一の状況でも恣意的な認知作用によって行われる可能性があることを示した。更に、基本的なイメージスキーマに含まれるいくつかの要素が前景化、後景化、捨象され、複数の意味へと拡張するメカニズムを観察した。

【キーワード】 個別性 連続性 恣意的認知作用 スキニング スキーマ

1. はじめに

これまで、「まだ」は「もう」との対立において分析されることが多かった。概念構成が近く、対をなすからである。では、「また」と「まだ」はどうか。表記を見れば、違いは濁点のみである。が、両者が対として意識されることはなく、まして比較する必要性が論じられることもなかった。しかし、日本語学習者の混同の実態から、比較分析の必要性を改めて認識するに至った。以下、長谷川(2000)での比較分析をさらに発展させ、両者を比較しながら類似点、相違点、意味用法のメカニズムの解明を目指す。^(注2)

2. 「また」と「まだ」の基本的性質

金水他(2000:76-78)は、(1)のような例をもとに時間副詞としての「まだ」が用いられる条件として(2)を挙げ、「想定」より「主張」が遅れている場合に「まだ」が用いられるとしている。^(注3)

- (1) 11時だと思ったら、まだ10時だ。
- (2) a. 時間の進展とともに推移・変化する状態が前提される。
- b. 発話に先立って推移の段階についての想定があり、その想定と発話によって主張される段階が食い違っている。

確かに、時間の経過、状態の推移という要素が「まだ」の意味には含まれており、(1)では明確な「食い違い」がある。しかし、次のような例での「食い違い」はどのようなものだろうか。

- (3) 彼はまだ初心者だけど、よく頑張っている。

聞き手が想定しているかもしれない仮説とのずれが、潜在的に「まだ」の動機になっていると説明することができるであろう。しかし、「誰が見ても間違いなく初心者である彼」についても(3)は可能である。このような状況では、「食い違い」より、「以後の推移」或いは「状態の移行」(池田1999)を強調する機能のほうが強く感じられる。(4)は、この傾向がさらに強い。

- (4) まだ東京に来たばかりの頃は、何もかもが新鮮に感じられました。

あえて「食い違い」を指摘するなら、現在との違いであり、「想定」と「主張」とのずれではない。このような「まだ」は、状態の移行を前提とし、そこに未到達の段階にあることに焦点を当てたものと言える。

以上のことから、「まだ」には、「状態の移行が想定されたが、設定時においては未到達である」ことが焦点となる用法と、「現在の状態と、以後の状態への移行」が焦点となる用法、二種類あると考える。

「また」は、同一の、或いは類似した事象の繰り返しを示すもので、「まだ」のような「想定とのずれ」「以後の推移」といった前提はない。次項で「まだ」と比較しながら、詳しく見ていく。

3. 「また」と「まだ」の示す状況の違い

次の(5)に示される「また」と「まだ」の状況の違いはどのようなものだろうか。

- (5) a. 西さんはまたタバコを吸っている。
- b. 西さんはまだタバコを吸っている。

この表現が示す最も一般的な状況は、(5a)では、

一時中断した「吸う」行為が再開され、現在はその行為の途中で、(5b)は終了しているはずの喫煙が継続中であること、或いは、単にいずれ終了する喫煙行為が継続中である状況である。また、一回性の行為だけでなく、習慣的な行為の繰り返し、継続とも解釈できる。「また」「まだ」の違いは、一回性の行為と同様に、「また」は一度喫煙の習慣が途切れた時の、時間的な間隔を前提としているのに対し、「まだ」その習慣が途切れることなく継続していることを表現するものである。

次に、繰り返しの回数について考えてみる。

(6)a. 厳しく注意されたのに、彼はまた遅刻した。

b. 厳しく注意されたのに、彼はまだ遅刻する／遅刻した／遅刻していた。

いずれも、二回目の遅刻という解釈が可能である。しかし、(6b)に示したように、「まだ」は一回のみの繰り返しを示す述語より、継続を示唆する述語のほうが自然に感じられる。「遅刻した」とする場合も、過去の習慣としての解釈なら可能である。^(註4)このことから、「また」は同類の事象が断続的に二回、またはそれ以上発生すること、「まだ」は同類の事象が二回だけではなく、継続する可能性を示唆し、連続性を前景化するものだと言えるだろう。

4. 状況レベルの意味と認知レベルの意味

ここでは、視点を変えて、状況レベルが同一のケースについて観察する。例えば、雨が数日間降り続けている状況で、次のような台詞が可能であろう。

(7)a. 今日もまた降っているね。

b. (今日も)まだ降っているね。

「また」は過去数日間の一日ごとの気象状況を参照して「今日も同一性の気象、雨が繰り返されている」ことを示し、「まだ」は数日間を連続した時間としてとらえ、「(いつか止むはず、或いは止むはずだった雨が)今日も継続している」ことを示している。現実には絶え間なく降り続けている事象について、一日という時間の単位を持ち込んで、恣意的な区切りを設けたものが「また」である。

状況レベルの意味と認知レベルの意味に「ずれ」があるとき、日本語学習者の混同も起きやすいようである。次の文は、長谷川(2000)において誤答が多く見られた例である。^(註5)

(8)かなり酔いましたが、まだ1杯ぐらいは飲みますよ。乾杯しましょう。

(7a)とは逆に、状況レベルでは「1杯」「飲む」という個別性の高い事象を捉えながら、認知レベルにおいては「まだ」によって「それ以前から飲んでいる」あるいは「飲める状態にある」という継続性が前景化されている。このように、日本語の発想では「まだ」が極めて「自然」であるが、認知作用の恣意的な選択によるものであることを指摘しておきたい。

5. スキャニング^(註6)

スキャニングという作用においては、「また」と「まだ」には類似点が見られる。ともに時間軸に沿って、ある時点の事象を参照情報とし、基準となる時点における事象との同一性、もしくは類似性についてスキャニングを行うという点である。二つの事象の間に時間的間隔(もしくは区切り、境界)を認知すれば「また」、認知しなければ「まだ」(状態が移行する可能性を内包する)を選択することになる。

さらに、別の種類のスキャニングとして、「また」は、一回性の動作も、習慣も、「要約的に」完結した個別の事象として扱い、「まだ」では、断続的であってもその間隙を捨象して連続したプロセスと捉える「継起的」なスキャニングが行われると言えるであろう。

6. イメージスキーマ

以上の観察から、「また」「まだ」のイメージスキーマは、次ページの図1のように描くことができる。「○」は完結性の事象、「■」は状態性の事象を示し、「まだ」における「○■」は、個別性を捨象した連続体が前景化されていることを示す。「また」の「○■」は「要約的スキャニング」による個別的な認知を表している。

7. イメージスキーマによる意味の拡張

時間表現「まだ」の語源は「いまだ」という時間表現だが、「また」の語源は、「股」であるという説と、不明であるとする説もあり、定かではない。^(註7)従って、「また」に関しては、拡張の方向は明らかではないが、時間概念と空間概念が相互に比喩的拡張に関わるという現象はごく一般的なものであると考え、「また」「まだ」に認められるスキーマを考察することにする。

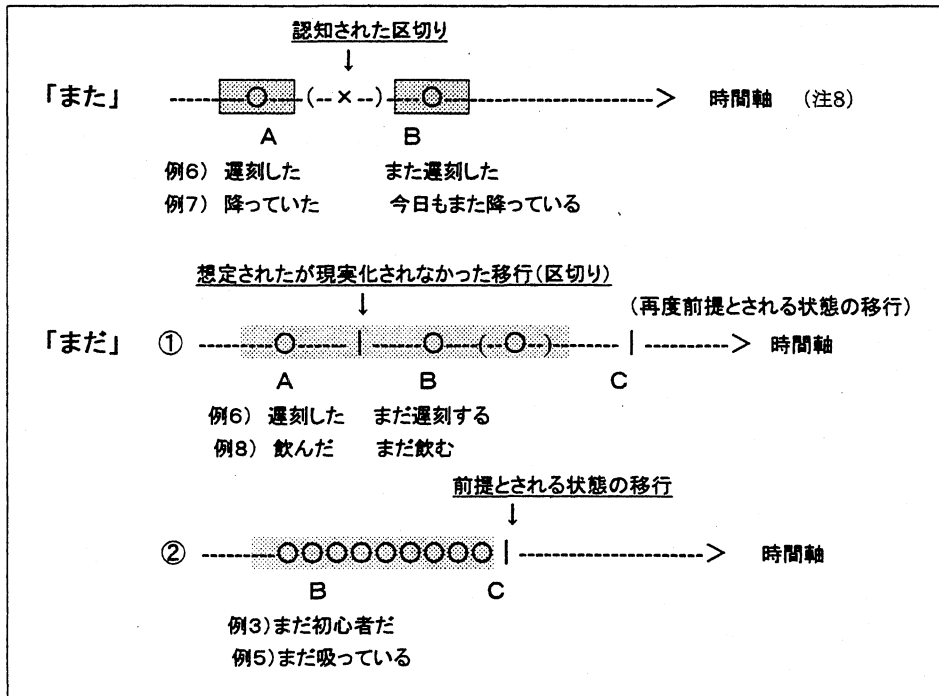


図1:「また」と「まだ」のイメージスキーマ

7.1 時間の経過と空間的分布 (注9)

空間の移動が時間の経過を含み、両者とも方向性を持っている、という共通点から、比喩的拡張が起きることは、容易に想像できる。

(9)a. ここにもまた明治時代の洋館がある。

b. こんな山奥にもまだコンビニがある。

(9a)には、空間の移動によって視点が移動し、以前と類似した個別の事象を発見した、というスキーマが見て取れる。(9b)は時間軸の連続性と方向性によって道、或いは視線の移動のスキーマで捉えられる。「こんな山奥にはないと想定したのに存在する」という点で、イメージスキーマの①に近い。

(10)彼は、この車の他にもまだ何台も高級車を持っている。(注10)

(10)では、実際には可算性の個体であるが、それを統合的スキーマで集合体として扱っている。数えるという行為に内包される時間的経過、目の前から他の場所への視点の移動など、いわば時間的、空間的「事象の展開」に連続性を見出している例ではないかと思われる。

7.2 方向性と連続性の前景化

「まだ」の方向性、連続性は程度を表すスケールのスキーマとしても機能する。時間経過、空間移動のスキーマが背景化、抽象化された例であろう。

(11)この部屋に比べたら、冷蔵庫のほうがまだ暖かい(まだまだ)。

(森田1989:1128)は「基準点に達していないため不満足、不十分であるが、他と比較すればこのほうがより基準点に近い(もしくは遠い)」としている。しかし、(11)では満足できる暖かさを基準点とする、というニュアンスは感じられない。むしろ、(この場合は寒さという)「マイナス」イメージへ向かうスケール上の、想定された限界との「ずれ」とするほうが直感に合うように思われる。更に、「まだ」には(12)のように「もっと」「更に」にも置き換えられるものがあり、(13)になると、空間、時間を表しながら、比較表現としてのスケールのスキーマがより前景化され、参照点の転換が起こっていると言える。

(12)この部屋は、冷蔵庫よりまだ寒い。

(13)あなたの番は、私よりまだ後ですよ。

7.3 個別性の前景化

「また」には、以下のような用法がある。

(14) 添乗員が嫌なヤツで、これがまた辛かった。
この「また」には、過去の情報を参照して類似性を表すという機能は見られず、むしろ、類似性がないこと、普通に想像する辛さとは区別したい感情を表している。(15)も同様に、他の行為とは類似性のないことを強調していると言える。

(15) どうしてまたそんなことをしたの？

このような用法は、(16)のような「また」の機能の延長上にあり、参照情報のスキミングを行った上で、個別性を前景化したものと解釈できるように思う。

(16) これはまた別の話だ。

これは、「またの機会」「またの名」といった用法にもつながるものである。

8. まとめと今後の課題

本稿では、「また」と「まだ」を認知言語学の概念を

用いて分析し、両者のイメージスキーマは異なるが、時間軸に沿ったスキミングが行われるという点で類似していることを示した。また、基本的なイメージスキーマに含まれるいくつかの要素がそれぞれに前景化、後景化、捨象されて、複数の用法が生じるメカニズムを観察し、特に、「また」は個別性、「まだ」は連続性が特徴的であるが、その認知は時に恣意的作用であり、また、その特徴は意味的拡張において前景化され用法として発達していることを示した。

このような詳細な意味の分析によって意味のメカニズムを明らかにすることは、日本語文法の解明のみならず、日本語学習における問題点を理解し、より効果的な指導を行う上でも役立つものと思う。今後の課題としては、まず、今回網羅できなかった用法(接続詞としての「また」も含む)のメカニズムを探り、さらに、実際のデータを用いてさらに検証を行う必要があると考えている。

【注】

1. 長谷川(2000)は、日本語学習者を対象に小規模な調査を実施し、特に中国語を母語とする学習者の母語干渉に焦点を当てた分析を行ったが、日本語の「また」と「まだ」にも学習者の混同を促す要因があることを明らかにした。
2. 本稿で用いる認知言語学の用語は、他に断りがなければ、山梨(1995, 2000)による。
3. 金水他(2000)の「もう」に関する言及は省略する。
4. 「まだ」と述語の性質、アスペクトとの関係については、池田(1999)、金水他(2000)に詳しい。
5. 穴埋め形式で、与えられた文の()に「また」「まだ」◎(どちらでもいい)を選択して記入するテストを行った。
6. 定延(2000:17-19)と池上(2000:143-44)を参考にする。
7. 『日本国語大辞典』(1987)では八つの仮説を掲載し、『日本語文法大辞典』(2001)は不明と結論づけている。
8. 「また」は並列の意味での副詞、接続詞として使われる場合は、時間とは無関係とも言えるが、二つの事象に言及する上で、必ず二番目の事象に「また」が用いられることを考えると、言語行動自体の時間の経過に関わっており、スキミング、参照という作用において時間的な要素は否定できない。
9. この概念、用語は定延(1999)による。
10. 長谷川(2000)の調査では、数量の連続性、個別性を恣意的に選択している例文に、学習者の誤答は多かった。

【参考文献】

- 池上嘉彦(2000)『「日本語論」への招待』(講談社)
- 池田英喜(1999)『「もう」と「まだ」——状況の移行を前提とする2つの副詞』『阪大日本語研究』大阪大学文学部日本語講座、第11号、19-35。
- 池田英喜(2000)「状態の移行前を表す『もう/まだ』について」『阪大日本語研究』大阪大学大学院文学研究科日本語講座、第12号、49-56。
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子(2000)『日本語の文法2、時・否定と取り立て』(岩波書店)76-82。
- 定延利之(2000)『認知言語論』(大修館書店)
- 定延利之(1999)「空間と時間の関係—『空間的分布を表す時間語彙』をめぐって」『日本語学』Vol.18, No.9, 24-34。
- 日本国語大辞典刊行会(編)(1987)『日本国語大辞典』(小学館)
- 長谷川玲子(2000)「『また』と『まだ』の意味領域に関する一考察:中国語話者の習得における問題点をめぐって」『産能短期大学紀要』創立50周年記念特別号・第34号合併号。231-38
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』(角川書店)
- 山口秋徳・秋本守英(編)(2001)『日本語文法大辞典』(明治書院)
- 山梨正明(1995)『認知文法論』(ひつじ書房)
- 山梨正明(2000)『認知言語学原理』(くろしお出版)